
フットボール・ワンダラーズ

鳥場 有土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フットボール・ワンダラーズ

【Nコード】

N9854T

【作者名】

鳥場 有土

【あらすじ】

サッカーを諦め家族や父と袂を分けた男が、父の死をキッカケにふるさとへ戻ります。その実家には養子のためにやって来たサッカー少年が、そして父はサッカークラブも作っていた。

クラブの選手や監督も何なら訳ありな流浪者達揃いのようです。そんな人間達の集まるクラブが自分達の居場所を作って行く、サッカークラブを通じてそれぞれ成長していくお話です。

帰郷

帰郷 その1

親父が死んだ。

15年ぶりの鹿児島空港の外は、やっぱり肥料のにおい。景色はいろいろと変わったけれど、においでわかる。

帰ってきてしまった。

サッカーをする事を失って、家族と顔を合わせる事をやめて、ふるさとを飛び出して、父の姿を消すためにがむしゃらに勉強して、仕事に就いて、そうやってひたすら生きてきた。正月もお盆も、友人の結婚式も、鹿児島で関わる事を全て避けてきた。テレビもネットも新聞も、サッカーの付くものは全て避けてきた。

唯一断ち切れなかったものは、母親の携帯電話の番号だけ。その番号に自分から架けたのは人生で2回。大学の卒業日と、母親の入院の翌日。母親からの番号を受け取ったのは人生で4回。大学の入学式の日、母親の入院の日、退院の日、そして親父の死亡連絡。

父親の死に姿を見たいわけじゃない。ただ、これから一人になる母をこれからもサポートして貰えるように、実家の会社の社員や近所のおっちゃん達に筋だけ通さなきゃ。それだけだった。気分は重いが感傷は何も無い。

昔と相も変わらず真っ昼間から灰を噴き散らす、バスの窓越しの桜島の姿が、ただただ苛立たしかった。

空港からバスに詰められて、日が陰り出していた。何も無い音しかなくなる。バスのタイヤと、時々通る対向車のエンジン音だけ。それがしばらく経つと、バスは不機嫌に停まり、僕を急かすように降ろす。

じめついた風とアスファルトの照り返しには参るが、明後日にはまたここを出るのだ。どうだっていい。早く自宅に戻って、この服を洗濯して、仕事に戻って、一つ片付いたらビール呑みに出かけてシャツが透け始めた頃に、僕は実家に戻った。

屋根付きのシヨベルカー用の車庫は無くなっていた。庭の植木も無くなっていた。隣の家は残ってるが中身が無くなっていた。バタバタと何か危ないものでも見つけたように、老けた人達が庭へ歩いて来る。僕が目的か。

「潤くん帰ってきたのね、よかった、はよ上がらんな」「そげん歩かんばオイでも呼べばよかったのに、もう」

腕まくりで汗だくで駆け寄ってくれる東元さん。シワが増えて髪の毛がすっかり白くなった以外は変わってない。この人が今でもここにいてくれる事が、なんか嬉しかった。

玄関の引き戸が変わっている。そりやそうか、この家も古いものな。縁側脇に小さなサッカーゴールがある。少しだけ苛ついた。それで布団でも干すのか。

引き戸を開けると、線香の匂いにちよつとたじろぐ。大量の黒い靴が玄関に散乱して、見た覚えの無いスーツケースやカバンが廊下に放り込まれている。鼻をすすする音やいろんな方言の会話が飛び交っている。そして改めて思った。ああ、本当にこの家の人間が死んだんだろうな。

「潤。」僕の姿に一番早く反応したのは従姉妹の月原楓、去年東京で一晩会って、酒を呑んだ。それ以外は全てが15年ぶりの人間達。反応のしように困ってると感じた。そういうものなんだろうな。たくさんの久しぶりの親戚や会社の人間達が、父親の死体の側に座っている。

「おかえり、潤」さすがに母親の生の声にはちよつとこみ上げた。母は落ち着いている。父親の死体の側で。

白い屏風があつて、白い布団と枕、そばに曲がった蠟燭と線香、そしてこの殯りの間の角にはネットに入つて吊り下げられたサツカボールか。何を今さら。こめかみにピツと線が走つた。

「久しぶりでした。」一群に声だけ掛けて、父親の抜け殻の側に座る。今さら死体の前で悪態をつく気にもなれなかつたし、だからつて涙が込み上げるわけでもなかつた。これが親の死に姿を見るといふ事か、それだけだつた。

生きていた記憶の姿から15年くらい年を取らせた、そんな顔だつた。

「んじゃ、自分がやること今のうちにやっておこうか」僕はそう切り出して、居間に行つて親父の手続きの書類に目を通しに向かつた。「潤ちゃん、そんだけね?」「社長がね、いま・・」伯母のゆっこさんと、東元さん。優しくして正義感があつて尊敬出来る人達だ。僕はこの人達を邪見に思う理由は何一つ無い。

「どうしても久々ですし、私も参つてるのかもしれない、すいません」頭を下げる。

半分は本当に戸惑つていたのかも知れないし、半分は、とにかく穩便にこの時間をやり過ぎたかつた。

「千鶴さん、潤君は今の家の事知らないのでしょ?」「どげんする?今から」「千歳くんは明日戻つてくつとでしょ、どうなるかい」

僕が出て行つた部屋では何やら話が盛り上がつていた。

「明日葬儀を出したら、ちゃんと言いますから大丈夫。まあわかつてくれるとも思わんけど」母親の長畑千鶴はそう言つて、笑つた。

翌日の朝早くから葬儀はあつけなく終わり、実家から片道1時間の斎場で、親父の棺は跡形も無く燃えて消えた。

さすがに葬儀中は土建屋よろしく実家の庭は人だかりだつたが、親父は前もつて言い残していたそうだ。何の花輪も立て看板も建て

させず。火葬場へ向かうバスが消えたら、実家はすぐに日常の光景そのままに戻ってしまった。

見栄えにこだわらない、片田舎の土建屋の社長は1万5千円の骨壺に納められて、実家の側の霊園に封じ込められた。親戚達が一生懸命に「後片付けも手伝う」と言ってくれたが、僕が言う前に母親が優しく笑いながら断った。

「夕方になってしまってから」そう母が言うと、みんな、すうつと、丁寧にお辞儀して、近所の地元の親戚の元へ離れて行った。

東元のおいちゃんは葬儀後、せつせと親父の引き継ぎ書類やら会社の事務片付けに追われるために、実家の裏の事務所へ急いだ。葬儀中ずつと泣き続けていたのはおいちゃんだけだった。おいちゃんがこれから社長なら大丈夫だよな。あとはもう関係のないだろうことばかり。

母が昨日からこうして葬儀が終わっても落ち着き過ぎていて、僕はかえってちよつと怖かった。最後に楓とゆっこ伯母さんが自宅へ帰って、僕にとって15年ぶりに実家は家族だけになった。たった二人の。

「それじゃあ、潤」もう喪の明けたような元気な母の声。

黒着物からさつさと紺色の薄い着物に着替えた母の感性にも驚いたが、何か大きい話があるのか、と感じさせているようで、僕は眉を引きつらせた。

親父の遺影と霊壘だけが残された、小さな祭壇のある広間。セミの声が元気な、鹿児島島の片田舎のとある夏の昼下がり、僕の新しい人生がはじまった。

「あんたがちゃんとした形で帰って来るまで秘密にしときなさい、
ってお父さんに口止めされてただけだ。もうお父さんがこうなっ
たからね」

母の話が全く読めない。

「いやもう自分もすぐに帰るし。別に何の秘密つても構わんけど。
会社とかは東元さんがやるんでしょ？なに？借金あるとかじゃない
よね？」おどけるつもりもなかったが、話がさっぱりなのでとりあ
えず自分を落ち着かせたかった。

「長畑の会社で今、サッカーのチームを持つてるの」
なに

「そこに入ってるチームで、」
自分が出て行って、何でサッカーやってんだよ

「とーちゃん！！」突然子供が、縁側を伝って窓から勢い良く広間
に飛び出してきた。

「わああああああああああ」親父の遺影を目にして、家を叩
き割るように子供は泣き声を上げ始めた。

「千歳ーっ！！」半袖シャツにジャージの浅黒い男が縁側に駆け寄
って、広間で泣き叫ぶ子供であろう名前を叫ぶ。

千歳、と呼ばれた子供と一緒にジャージを着た子供達も縁側に一
斉にワイワイ駆け込んだ。

「おいちゃん！！」「先生！」「ながはたせんせい！！」「無秩序に
子供達が叫び続ける。

そしてまた子供達と同じジャージの今度は若い男達がこれまた縁
側に駆け寄って来る。

「社長！」「只今戻りました！」「勝ちました！プレーオフです！」
祭壇の向こうへ、そして母を向いてめいめい叫ぶ。

なんなんだこの状況は。なんだこの子供大人入り混じった集団は。
先生ってなんだ。プレーオフってなんだ。

そもそもこの子供は何だ。親父の写真見て、とーちゃん？一体今

僕の前で何が起きてるんだ。

「千歳、落ち着きなさい！んで靴をちゃんとぬがんば！」浅黒い男が慌てて叫ぶ。そして母が千歳と呼ばれる子に駆け寄って、覆い被さった。

「監督、とーちゃんがとーちゃんが、かーちゃん、とーちゃんが」
ひつくひつくさせながら、子が叫び

「わああああああああああああ」また泣き叫ぶ。

「千歳・・・」母が膝を折って、ぎゅっと子供を抱きしめながら頭と背中をさすり続けた。

縁側ではその光景が元で、堰を切ったように、葬儀の時よりも大きな泣き声を大きな男達やら子供達が上げ続ける。

「こういことなの」僕を向いて、一言母が言った。

どういことだよ、と言う余裕さえ僕には無かった。

そして母が僕と昨日会ってから、初めて泣き顔を見せた。

帰郷 その3

その子の名前は、鳥島千歳という、小学校6年生の男の子だった。

養子縁組に向けて、2年前に鹿児島市内の施設から僕の実家へやって来た男の子。

そして、その日に親父がオーナーとして、サッカークラブが設立された。

鹿児島ユナイテッド・フットボールクラブ

それが親父の遺影と霊璽の前で、みんなして泣き叫んだ者達のチームだそうだ。

「本当に失礼しました、すいません！日を改めて参ります。これからもよろしく願います」鳥島千歳に「監督」と呼ばれていた男が僕と母に向かってお辞儀して、他の選手達を引き連れて帰って行った。なにがなにやら、とにかく凄い光景だった。

そして僕を一目見た鳥島千歳も土足のまま広間を飛び出して家を出て行った。

「あつ・・・！」ホントなんなんだ。

「母ちゃん、一体何がどうなってるんだよ、なんなんだよこれ!？」僕はショックというかなんというか、自分の全く与り知らないこの状況に、僕ももうパニック寸前だった。

なにより僕がいなくなったこの家で、親父によってサッカーがまた行われていた事が、なによりも腹が立って、許せなかった。だが「はよ、千歳を連れ帰ってこんかつ!!！」

母の何十年ぶりの突然のカミナリの元、今の僕には状況把握さえ許されなかった。

僕の田舎は大して何も無い割に、無駄に広い。僕にとって見ず知らずの小学6年生男子をどうやって見つけろというのか。

田舎を流れる川の向こうには今も粗雑な作りの運動場が見える。地元の小学校の少年団か。サッカーやってんな。僕は小5になって田舎の一つ向こうの街のクラブに入るまでは、あの運動場でいつも練習して。帰りはいつも川沿いの河川敷に行つて、軽石で護岸にマール書いて、それに向かってボール蹴っていたか。あても無いからどうしようもない。河川敷へ。

もう夕方ではあるが、明るい。そして暑い。僕はもう下着の着替えなくなっちゃうんじゃないか。千歳、というか子供の姿は・・・ない。子供が全然いない。うちの田舎も確実に子供がいなくなっている。汗がぼとぼとして意識が薄れながら今はどうでもいいことを考え始めた。

「あら長畑くんね、あら何しちよつとね、家はもうよかかね」散歩のおばちゃんは何十年かぶりに会う、近所の写真屋さん。

「あ、っどうも・・・、すいません・・・、えつとですね・・・。ああ・・・うちの家の・・・子供見ませんでしたけ」喪服のズボンに普通のワイシャツ、革靴にうすい靴下、こんなんで走り続けてたらそりゃ息も上がるわ。

「ちとせちゃんでしょう！今日もあそこにおっど」おばちゃんはここにこしている。

「あそこ」僕は、両膝に手をつきながら、おばちゃんが指を指す方を見る。

「知らんと？土手を削ってサッカーを蹴る壁が出来ちよいよ。お父さんが自分で作られたのよ、役場に許してもらっせえ」

「将来はちとせちゃん、ユナイテッドでJリーグ優勝すつど」我が子の自慢のように、おばちゃんは笑った。

ゴールを一回り大きくしたような、全然真つすぐでないうねりを帯びた巨大な壁が河川敷の奥に出来ていた。黒板の色をした表面に白色でゴールの枠が書いてある。周りにはネットもフェンスも無いけれど、壁の周りの地面はきれいな芝だ。赤オレンジ色に包まれる田舎の中で、壁の影が怪物の様に延々と伸び、壁の前の小学生を真っ黒く覆う。子供の顔が大蛇か大鯨の目玉のように、異様な姿を形作っている。

テイインツという軽い響きと、バスつという乾いた響きが規則正しく鳴り続ける。リズムが全く変わらない。あのうねった壁で陰場の中蹴り続けているのか。

「千歳くんけ!？」

心地よいリズムの音が、ピタリと止んだ。

「とりあえず帰るが。ああ・母ちゃんもはよ戻ってこい、って」
なんだこのセリフは・僕は小学生か・。

「僕はサッカー出来なくなるんですか」

？・・・？

「東元さんに言われたんです、とーちゃんの子供がユナイテッド辞めるって言ったら、ユナイテッド無くすって」

「僕サッカー出来なくなるんですか」

もう本当に・どうしたらいいものか・。・。・。ん。” サッカーが出来なくなる”。いつどこで聞いても、嫌な言葉だ。この一言で僕は、サッカーからこの田舎から目を背けてきた。そして墓の中の骨の主を恨み続けてきた。

「とーちゃんからいろいろ聞きました。今よそにいる子供の潤は昔凄かった、って」

・・・。

「絶対大学とかJリーグに行けるって、みんなから凄いつて言われてたって」

「でも心臓が病気だったからもう治らないから高校で辞めろつて言われたって、続けさせたら死んでしまうって」

目の前の子供には何の罪もないが、今目の前のもの何もかもぶっ壊してやりたかった。あと数年で死んでもいいから、プロになりたかったんだ。それだけが生き甲斐だったんだ。

「その話するととーちゃん練習の時とかいつも泣き出して、みんなに笑われて、コウタローとかケンジにとーちゃんとかも笑って監督とかも泣かないでって言って」

「とーちゃんいつも、俺のせいだ俺のせいだからって言って練習するから、僕が絶対に代わりにプロになるって」

・代わりって、・。・。そんなもの欲しくも何とも・親父も俺の事気にしてたのか・。。

「僕のかーちゃん死んで、みんないなくなつて、鳥島先生といつしよにサッカーしてたら、とーちゃんが来てくれて、ここにきて」

千歳はまた泣きそうだ。鳥島先生というのが、施設の方か。その人の苗字か。

「サッカーしたいなら一生懸命頑張れつて、とーちゃんが言つてくれて、頑張つたら喜んでくれて」涙を流しながら。

「ユニテッドのトップチームが九州リーグのプレーオフに行つて、僕たちも今日まで試合だったのに、とーちゃんが」

すっかりうす暗くなつた田舎の川沿いの大きな壁の前で、また小さな子供の慟哭が響く。真つ黒い壁の影の中で、子供の悲鳴を飲み込んだ壁は、反芻して吐き出す怪物のような声の反射を起こす。

「かーちゃんが死んで一人になつて、」必死に息を吸いながら、「とーちゃんもまた死んで、みんないなくなつてるから」

「死んだらみんないなくなつて、悲しいから、みんな泣くから」「僕死なないからみんなの代わりにサッカーしてみんなが死なないようにするから」

「潤が生きててよかつたつて、いつもとーちゃんが言つてたから、僕絶対に代わりに頑張るつて、とーちゃんと約束したから」

「潤さんも死んだらダメだから、死んだら嫌だから」

そこまで千歳が泣きながら僕にずっと話かけてきた。そして僕も泣いた。四つん這いで顔が泥だらけになつて。いつしか千歳は鳴く事さえ止めて、僕の事を心配そうに見ている。この田舎に帰つてからの親父の亡骸の姿が死に顔が全部よみがえつてきて、泣いて叫ぶ以外どうしようも出来なくなった。気が戻つたら、僕はどのくらい泣いていたんだろうか。

高校でサッカーを辞めてからの15年間で、今日壊れた。親父の悔恨なのか、懺悔と言つか心残りだったのかどうか、もう確かめられないけれど。立場も歳も違つけど、親父はこの千歳と言つ子供を

通してちよつとでも僕を見てくれていたのか。

そういうものだけじゃない。親父は俺よりもずっとサッカーが好きだった。いくら遊びでもサッカーは中途半端にしない。子供引き取ってチーム作るなんてバカな事、そうそう出来るもんじゃない。

壁蹴りだつてそうだ。親父はこの子になんか見たんだ。なにより、この子をこれ以上放浪させちゃいけない。親父が目をつけた子供である以上、勝手ながら落とし前をつけなくてはと思つてしまった。帰るが。暗くなつたね」ぐずぐずの声で千歳を呼ぶ。

これから先、僕の人生全くこの帰り道のように真つ暗になつてしまふが、とりあえず明日自宅に戻つたら、辞表を書いて引つ越しの準備を始める事にした。

そして実家まで、千歳の肩に手を載せながら歩いた。

母は家族の葬儀後とは思えないような夕食を準備していた。千歳は力いっぱいがつついて、その場で力つきて寝た。

今日3試合戦つたそうだ。

「潤、昼からの話だけど」

「んにや、この子から聞いた。今度帰つてからゆつくり聞く」

「また帰つて来るの？」

「またすぐ帰つて来るから」

「帰つて来るのね、ずっと」

「うん」

「うちの会社もこの子達も、お金が苦しいよ？」母はにやにやしながらふっかけてきた。

「なんとかすいば、よか」

「アンタの部屋は今千歳のものだけど」とても喪中とは思えない顔をしている。

「縁側でいい」

そして僕は親父の五十日祭の前に、田舎に帰った。

間もなく小学校は2学期になった。

新学期から、千歳の名札と鹿児島ユナイテッドの登録名を長畑に変えた。

夕暮れ、芝田修二とユナイテッド

親父の五十日祭が明け、御霊屋に霊璽を移した。遺影をその脇に置いた。僕の机のある縁側から、常に親父が見てる。

僕は東元のおいちゃんの元、長畑建設の事務員扱いで雇ってもらった。

そして9月の半ば、まだ夏の匂いが一向に消えない夕方、僕はユナイテッドの練習場に足を踏み入れた。

「サッカークラブの方をとりあえず見て貰って、それで判断して欲しい、続けるか、何処かに譲るか置くか」東元社長の言葉は重かった。

今はどこもそうだが、田舎の土建屋に道楽のスポーツクラブなど、いつちよ前に運営出来る金も余裕も無い。正直事務室の書類を見て、千歳の顔など自分の頭から一瞬吹っ飛んだ。

社会人チームは県リーグを突破して、九州リーグのチーム補充のためのプレーオフに向かうらしい。少年チームは全県のトーナメント本戦に進む。

会社の役員待遇を断ったのも、ユナイテッドの代表を引き受けるのを決めきれない事も、あまりにもこれからの2つの運営は苦しい、と感じたからだった。

一体親父は何考えて、ここまでやってきてたんだらうか

地元運動場はただの土トラックの中に荒い芝が張ってあるだけだが、照明設備は昔から相変わらずしっかりしている。だが今日はここが練習場ではない。公営運動場に優先順位など無い。先に予約した者が勝ちなのだ。今夜は町内地区対抗のパパさんソフトボールが行われている。

ユナイテッドの今日は、地元の川を挟んだ向こうの街の運動広場

が会場だった。

フェンスと芝はあるが、照明が無い。使用申請をした者が町外者だったというだけで、使用料2時間100円のはずが200円になっってしまった。

9月の夕方はもう薄暗い。粗末な簡易トイレ一つに水飲み台が一つ。運動場が広いのは救いだったが、子供と大人が合わせて40人近く集ってボールを蹴り合っている。ごちゃごちゃにしか見えない。こんな毎日を過ごして、よく県リーグを勝ち上がったもんだ。どうにも掴みよしの無い気持ちで、芝生を区切った金網に近づいた時。「長畑さん、お疲れさまです。芝田です」

千歳が先月の葬儀後の広間に飛び込んできた時、必死に千歳を静止しようとしていた浅黒い男。

「どうも、ちよつと遅れました、すいません」

「社長が亡くなったって聞いた時はほんと、私達もう終わりだと思っただんですが、あなたが帰郷されたのを見た時に心底ホツとしました。やりますよ、うちのトップは」

話がどうにも切り出しにくい。僕と同年ぐらいか、いや相当に若く見える監督芝田は羨むくらいに目がキラキラしている。

それにしても、この背のあまり高くない、今30代？40ちよい？で柴田、じゃなくて芝田って・・・。

田んぼに囲まれた、草の匂い立ちこめる蒸し蒸した運動場の中で、僕は暑さから来るものとは別の汗を感じた。

フルコート1面分しかない運動場だが、なかなかみんな走っている。それぞれの選手は親父が頭を下げて、いろんな職場に放り込んだそつだ。

大企業お抱えなら午前中仕事させて、午後はたっぷり練習生活が満喫出来るだろう。そんなクラブは、軽く考えても鹿児島ではまずお目にかかる事は無い。

親父はとにかくそれぞれの職場での生活を優先させたそつだ。そ

して夕方の練習でとにかくボールを蹴らせて、走り込みは毎日朝早く起きて自主練習で行え、というのが掟だった。

毎日走り込んだ距離、時間を日記につけさせ、監督に提出。やらない者は監督を飛び越して、親父が選手の会社に乗り込んでカミナリを落とす。僕がここで過ごしてきた昔と何も違ってないじゃないか。

そんな生活を2年近く続けて、こんな場所でボールを蹴ってる男達は、そういうやり方を受け入れた人間なんだろう。ホントにみんなよく走れている。

そして、芝田もとにかく声を出さず、よく走る。運動場を選手に負けないぐらい走り続けて、全ての選手に声を掛け続ける。大人にも、子供にも。そして千歳にも。

話をする時にくり出す大げさにも見えるジエスチャーが、やつぱり引つ掛かる。そして佇まいがどうしても体育会系じゃない。正直こんな田舎のクラブであんな若そうな見た目で監督だなんて、場違いな人に思えた。

そして、僕の中で監督芝田は、確信のようなものになった。大隅体大から浦和に進んだ、芝田修二じゃないのか。

「芝田さん。芝田修二ですよ」

「ですよ、長畑建設に預けてた名簿、間違っていましたか？今月更新したばかりで」

「いや、の、大隅体大から浦和に行かれたですよ、自分が中学校の頃でした」

「ああ、ですねえ、だから私こころ辺の地理も詳しいんです」さらっと言うもんだ。

出身こそ東京だったが、鹿児島の大隅体育大学で活躍し、天皇杯本戦でJの広島相手に2得点を挙げ、そのままJの浦和に進んだ。そこまではよく覚えてる。ただ、その後が・・・

「あの、・・・すいません。浦和におられてから、あまり知る機会が

なくて・・・。今までどこに、っていうかなんでこんなところにおられるんですか」一気になんか緊張してしまった。元Jがいる。こんなところに。いや聞き方もちよっとばかり失礼過ぎて・・・しまった。

「ああ・・・。社長に拾われたんです」

「2年目の時に売ってもらったんです。南米に」

芝田修二の入団した当時の浦和はまだ低迷期だった。親会社の不祥事もあり、資金力も苦しくなる。それでも浦和のネームバリューだけは輝いていたから、即戦力で活躍出来ない選手は移籍の名目のもと、浦和の運転資金となるべくお金に換えられた。

芝田も例外ではなかった。下位クラブとはいえレベルの高いフオワード陣を押しつける事叶わず、サテライトとベンチの往復の日々だった。そして新天地への辞令を受け取る事になる。

そこは日本ではなかった。アルゼンチンはリオネグロ州、ビエドマという州都のクラブ。

「私海外組なんですよ、すごいでしょ」にこにここと向いて笑う。

「選手を他クラブに放出し過ぎて、サポーターも結構頭に来てたんですよね、んで国内移籍じゃ角が立つからって、アルゼンチン。活躍はなかったけど、あん時の浦和のフランコって選手の家族がビエドマに私を紹介してくれて」

半分は芝田の実力、もう半分は親会社の影響力。南米での安定経営のためのPRをかねた、レンタルという道だった。

「給料安かったけどおもしろかった。ジュニアーズともやったし。すぐに2部に堕ちちゃったから、マスコミも食いつかなかったけど、んで何とかレギュラー獲って1部に向けて、って時に。足が壊れた」復帰まで1年、その後の活躍は未知数。よほどの名選手でない限り、ましてレンタル選手に手厚い庇護は行き届くほど、南米は甘くない。

「向こうのクラブハウスでクビって言われて、浦和も突き放しちゃうたからどうしようって。考えてたら、監督に救われて。選手じゃ

なくてもメシは喰えるぞ、どうする？って。やるに決まってるでしょって」

元アルゼンチン2部の日本人は所属クラブの監督の推薦を得て、同じ語圏は本国スペインで指導者を目指した。

「南米での出場数が効いてね、監督の口利きもありがたかったんです。8年間、向こうでサッカー場の芝生管理の手伝いしながら、何とか喰い繋いで、スペインでレベル3ってヤツまで取ってきて」

最上位ライセンス。おそらくは日本協会のAかS級にも相当するんじゃないか、日本で認められるかどうかはわからないが。

「まあ、それでも日本人がスペインでコーチやるって口はなくて、東京に戻ってもなんかあつて、んで大学のあるここに戻ってきてたら、社長に会って。んで今こうしてると」

親父は千歳だけじゃなかった。芝田と言う海外経験選手まで引き取ってしまったていた。

「社長の言ってる事がおもしろくて。居場所のない流れ者を集めて、田舎から日本中のサッカークラブに勝つて」

「んで、長畑潤って音信不通の息子にユニテッドをイヤでも見せつけて、田舎に連れ戻すんだって」

！？

「社長は、サッカーしたくても出来ない人間とか、居場所のなくなった人間にね、ちゃんとここでサッカー出来るぞって、ふるさとはあるんだよって。そういうのを作りたかったんだって」

「それで、長畑さんにも、サッカーを諦めてもサッカーが出来るって場所とか世界があるっ、て見せてやりたかったって。私もそれに載っかってね、今やってるんです」

「長畑さんがちゃんと帰ってきたら、このクラブは譲るんだって」
監督の顔を見られなかった。練習している選手の姿を見られなかった。

さすがに声を出せなかったが、立ち上がる事が出来なかった。夕

オルが生温かく、じつとりと湿った。

ハタから見れば、スポーツクラブなど只の道楽。今の僕には仲違いし続けた父親のたった一つの形見。

そんな話聞いて、どうしろっていうんだ。潰せるはずないじゃないか。

何の面白みもない、なんか不釣り合いなクラブの名前は、ユナイテッド。

抛り所をなくした人間達が自分達で居場所を作るためのクラブ。どんな境遇に置かれようとも、サッカーを諦めなくていいクラブ。そんな人間が集まるチーム、鹿児島ユナイテッド。

それはみなしご千歳のためだけじゃない。行き場のない元プロのためだけじゃない。サッカーのプレーを諦めたことで、全てを諦めた僕が、ちゃんともう一度サッカーに顔を向けられるための、最後の場所だ。

ひとしきり体から水を出して、まだまだ風は生温いが、手足も首もと涼しい。

僕は15年ぶりに、サッカーとちゃんと向かおうと思った。

千歳にこのジャージを着させ続けようと思った。

千歳はフェンスの側で、長身選手の股をドリブルで抜きさった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9854t/>

フットボール・ワンダラーズ

2011年6月11日12時55分発行